

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第162号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成22年12月21日

コサギ



2010. 9. 12 いしかり調整池 (石狩市北生振)

撮影者 浜野チエ子 (札幌市白石区)



も く じ

馬放牧場の水溜りにシギ・チドリ類が飛来	石狩郡当別町 道川富美子	2
野鳥の感染症を調べるのは人間のため？それとも鳥自身のため？	酪農学園大学獣医学部感染・病理教育群/野生動物医学センター	
	浅川 満彦	4
COP10の話題と最近の野鳥保護事業	帯広畜産大学 柳川 久	6
鳥を見始めて	札幌市中央区 吉中宏太郎	8
ヒグマによる人身事故防止について	北海道環境生活部環境局自然環境課野生鳥獣グループ	
	幌村 幸司	10
ヨーロッパトウネン観察記	札幌市手稲区 高橋 良直	12
[閑話]野鳥あれこれ ヨーロッパトウネンの呼称について	12
探鳥会ほうこく	13
探鳥会あんない	16
鳥民だより	16

馬放牧場の水溜りにシギ・チドリ類が飛来

石狩郡当別町 道川 富美子

今年（2010年）の8月中旬からほぼ5週間、石狩川沿いの馬放牧場にできた水溜りに、水鳥を中心に多くの鳥達が飛来しました。なかでもシギ・チドリ類が目立って多く、27種が観察されました。

放牧場は、当別町ピトエの石狩ホーストレック敷地にあり、札幌大橋下流左岸側、石狩川が大きく蛇行してきた茨戸川（石狩川旧河道）に囲まれた区域の中にあります。8月14日に愛護会会員の田中陽さんが水鳥に気付かれたのがきっかけでした。水溜りは当初でも30m四方に満たない広さだったのでしょうか。8月11日と12日の大雨で出来たようです（写真1）。

ちょうど堤防道路脇に車を止めるスペースがあり、堤

防に立つと広く見渡せることや、水溜まりとの間に堤防法面があるためか鳥達は近い割には人を気にしない様子だったことが観察に好都合でした。

表1にシギ・チドリ類の飛来状況を、簡単にまとめてみました。一日の観察時間はだいたい午前中の30分から2時間ほどで、田中陽さんの記録と合わせて、おおよその雰囲気がわかればと思います。

最初の8月14日、コチドリ、ウズラシギなど10種が観察されています。期間中、個体数が最も多かったのは8月28日の110羽前後です。その時はオグロシギ（写真2）、アオアシシギ、タカブシギがそれぞれ30羽以上、他はタシギ、コアオアシシギなどでした。種類が最も多かったのは9月6日の16種で、比較的稀なアメリカウズラシギやサルハマシギなども見られました。他に稀な種としては、9月7～11日のハジロコチドリ、9月11、12日のアカアシシギがあげられます。

水溜まりは徐々に小さく、浅くなり、9月10日を過ぎた頃からオグロシギ、アオアシシギなどの体の大きな種から順に姿を見せなくなり、同時に全体の個体数も目立って減り始め、9月19日のトウネン、オジロトウネン各1羽を最後に飛来が見られなくなりました。

この間の飛来日数はトウネンが最も多く、次いでヒバリシギとタカブシギでした。

シギ・チドリ達は、水溜まりや傍らの草場でミミズなどの餌をついばんだり、休んだりしていました。群の構成などから、いしかり調整池（石狩



写真1 放牧場の水溜まり上を飛ぶシギ類、奥には放牧中の馬。



写真2 オグロシギの群れ。

市北生振地区にある農業用貯水池)や、近くの工事現場の水溜まりなどを行き来していることが推測されました。

シギ・チドリ類の他には、コガモ、マガモなどのカモ類やアオサギ、ダイサギ、キセキレイ、ツメナガセキレイなど。ハヤブサが頻繁にハンティングに訪れ、チョウゲンボウ、チュウヒ、オジロワシなどのワシタカ類も通

過して行きました。

一過性の水辺環境でしたが、秋の渡りが始まった頃の石狩川下流域周辺の動きを垣間見た思いです。いっしょにバードウォッチングの楽しい時間を過ごさせていただきました皆様、ありがとうございました。

表1 確認種リスト(27種)

種名	確認日	確認状況
ハジロコチドリ	9/7~9/11	幼鳥1羽。主にコチドリ2~3羽と行動を共にする。
コチドリ	8/14~9/11	1~3羽を、ほぼ連日確認。
ムナグロ	8/29	1羽。降りてすぐに飛去。
ダイゼン	9/6	1羽。降りて、短時間で飛去。
トウネン	8/14~9/19	最大20羽前後を、ほぼ連日確認。9/9 標識(MOSKVA)幼鳥1羽を確認。
ヒバリシギ	8/14~9/14	1~5羽を、ほぼ連日確認。8/28~9/6 紋別コムケ湖の標識幼鳥1羽を確認。
オジロトウネン	9/2~9/19	1~3羽を、ほぼ連日確認。少なくとも2羽は幼鳥。
アメリカウズラシギ	9/8	幼鳥1羽。
ウズラシギ	8/14~9/13	1~3羽を、ほぼ連日確認。
ハマシギ	9/13. 14	幼鳥1羽。
サルハマシギ	9/2~9/10	幼鳥1羽を、ほぼ連日確認。
コオバシギ	9/1~9/8	幼鳥1羽。オグロシギ群に混じり、頻繁に往来。
エリマキシギ	8/29~9/13	1~4羽を、ほぼ連日確認。主にオグロシギ群と行動を共にする。
キリアイ	8/16~9/1. 9/11	幼鳥1羽。9/1までほぼ連日確認。
オオハシシギ	9/8	1羽。オグロシギ群に混じって飛来し、短時間で群と共に飛去。
ツルシギ	9/1~9/12	幼鳥1~6羽を、ほぼ連日確認。
アカアシシギ	9/11. 12	1羽。9/12朝、ツルシギと共に飛去。(注:道川 9/11未確認)
コアオアシシギ	8/14~9/12	幼鳥1~3羽を、ほぼ連日確認。
アオアシシギ	8/14~9/15	最大30羽前後を、ほぼ連日確認。水溜まりが小さくなるにつれ個体数が減少。
クサシギ	8/31. 9/2	1羽。タカブシギ群と行動を共にする。
タカブシギ	8/14~9/15	最大30羽前後を、ほぼ連日確認。水溜まりが小さくなるにつれ個体数が減少。
イソシギ	8/27. 28	1羽。
ソリハシシギ	8/31. 9/3	幼鳥1羽。
オグロシギ	8/14~9/12	最大40羽前後を、ほぼ連日確認。比較的頻繁に往来。
オオソリハシシギ	8/14. 16	1羽。(注:田中陽さん確認)
ホウロクシギ	9/3	1羽。草地に降りて歩き、短時間で飛去。
タシギ	8/14~9/12	1~7羽を、ほぼ連日確認。

野鳥の感染症を調べるのは人間のため？それとも鳥自身のため？

酪農学園大学獣医学部感染・病理教育群／野生動物医学センター 浅川 満彦

感染症がとにかく、今、喧しい。北海道野鳥愛護会から依頼されていた本拙文の執筆開始が遅れたのもそのせいである。直近では、2010年10月、稚内大沼で高病原性インフルエンザウイルスが飛来したカモ類から見つかったので、著者が運営する野生動物医学センター（注1参照）ではその対応で忙しくなるのである。寒冷や餌不足など厳しい天候条件が、鳥の死体を多数発生させる要因の一つなので、冬に向かうこれから約半年、とても憂鬱になる。たとえば、近所に鳥が死んでおれば、その死因は謎の感染症ではないのかといった市民からの問い合わせやそれを否定（検証）するため公的機関が持ち込む死体の対応があるが、これが時を選ばない（つまり、私の都合などお構え無し）からだ。

冒頭から愚痴った。本題に戻る。さて、病原生物や寄生虫（著者の専門；注2も参照）に感染していても必ずしも病気（感染症）として顕在化するわけではない。たとえば、前述した生息環境の激変や化学物質の暴露、高齢・若齢などで免疫力が減じた状態にある場合、概して病気として認知される。すなわち、感染症は、病原体、宿主および環境の合作といえよう。一方、症状を示さないで体内に病原体を保有した状態を不顕性感染という。そのような動物（本文の場合、野鳥を指す）をキャリアーやベクターなどという。

このような動物（特に飼育種）の感染症について、獣医療では個体レベルの診療に重点が置かれる。しかし、野鳥の場合、流行予測をする診断・疫学が重要である。このような感染源がヒトや家畜・家禽に悪影響を与えることはすぐに理解できよう。されど、同時に、野鳥の個体群保護の上でも重要な研究なのである（以上、浅川、2010）。

一例を示す。ウエストナイルウイルス（以下、WNV）が宿主としてタンチョウ（*Grus japonensis*）を選定し、日本国内でWNVが流行した場合に、絶滅危惧野生鳥類の個体数がどのように変化するかというシミュレーションを実施したことがある（大沼ら、2010）。それは、WNVがヒトや家畜のみならず野鳥にも大量死を引き起こすことが知られているし、すでに極東ロシア地域まで分布が拡大しているため（Saito et al., 2009）、国内に分布が拡大する可能性が高いと判断されたからだ。また、絶滅危惧野生鳥類の中で、個体群動態に関する情報（繁殖開始年齢、齢別死亡率、産卵数等）が蓄積されているのも宿主モデルとしてタンチョウを選択した理由である。シミュレーションではConservation Breeding Specialist Groupが無料提供するソフトを使用した。詳細は大沼ら（2010）に譲るとして（別刷り希望者は著者にメールされたい）、結果を図示した。まず、タンチョウの個体数の変化は図1に示

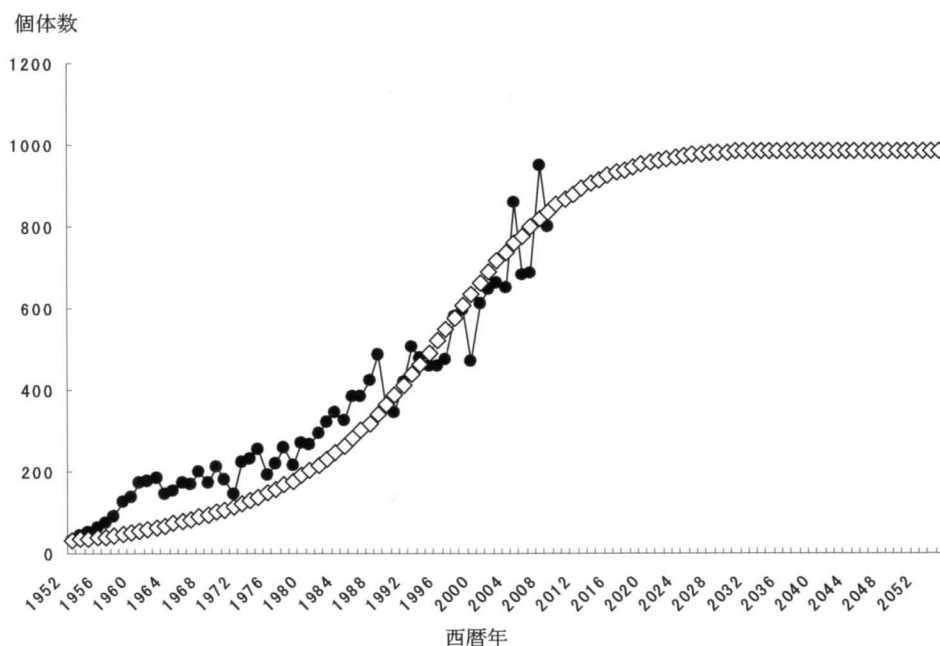


図1 WNVの侵入がなく、また突発的なタンチョウ大量死も発生しない場合の北海道における個体数変動のシミュレーション結果（大沼ら、2010）

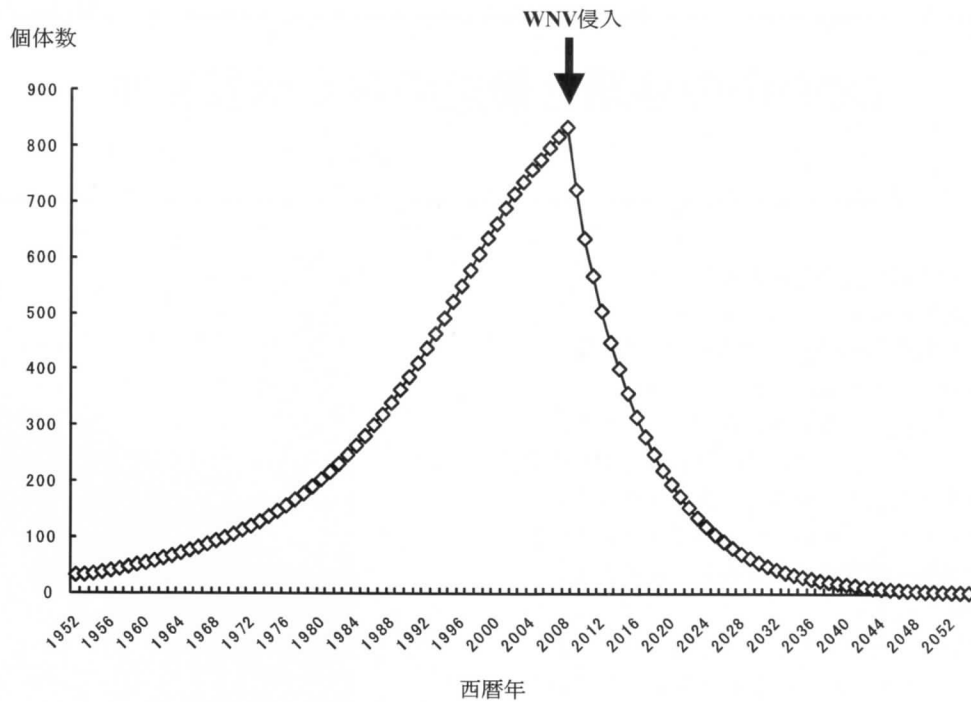


図2 WNVが北海道に侵入した場合(矢印)のタンチョウ個体数変化予測(大沼ら, 2010)

される通り、プラトーには達するが個体群は北海道で、しっかりと維持されると予想された。ところが、来年あたりにWNVが北海道に侵入した場合、図2のように最短で24年、最長で72年、平均すると42年で絶滅するという。もし、これが正しいとすれば、野生個体群の防疫対策は現実的ではなく、飼育個体群への対策を優先的に行う必要があると読み取れる。たとえば、WNVの国内侵入が確認された時点で、速やかに飼育個体群にワクチンを接種し、飼育施設周辺の蚊の防除といった対策が考えられよう。限られた資源(予算、ヒト、施設など)を、短期間に有効活用するためには、「平時」である今から「有事」への備えをすることは、基本のキであろう。

と、いったことを、このような思考実験は示すのだが、その基盤は、我々サイドでは病原体保有状況の疫学調査や感染実験などの情報、皆さんのサイドでは弛まない野鳥個体群変動の情報である。今後も、野鳥保全のため(そして、ヒトや家禽の健康維持のため)、協同しましょう!

引用文献

- 浅川満彦, 2010. 動物の病気と診断, (石原勝敏・末松隆志編)『生物の辞典』, 朝倉書店:332-335.
- 大沼 学・桑名 貴・浅川満彦. 2010. タンチョウ (*Grus japonensis*) をモデルとしたウエストナイルウイルスによる希少鳥類絶滅可能性評価. 北海道獣医師会雑誌, 54: 311-312.
- Saito, M. Osa, Y. and Asakawa, M. 2009. Antibodies to flaviviruses in wild ducks captured in Hokkaido,

Japan: Risk assessment of invasive flaviviruses. *Vector-Borne and Zoonotic Diseases* 9 (3): 253-258.

注1) 野生動物医学センターWild Animal Medical Center (略号WAMC)は、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業の一環で酪農学園大学附属動物病院構内に2004年、開設・設置された特殊施設である。ここでは野生種のみならず、動物園・水族館における展示動物、愛玩鳥やエキゾチック・ペット動物、特用家畜、あまり典型的な種ではない実験動物など、従来の獣医学では対象とされなかった動物を研究対象としている。2008年10月からは、同省私立大学戦略的研究拠点形成支援事業「生産動物・野生動物への環境汚染物質影響と感染症との関連性解明による防御対策」で中心的な役割を果たしている。

注2) 感染症を惹起する病原体には、プリオン(核酸を欠くが自己増殖能を持つタンパク分子)、ウイルス(RNAあるいはDNAを有し、生きた細胞内で増殖)、細菌(原核細胞)、真菌(真核細胞)(以上、微生物学関連分野)、原虫類、蠕虫類、節足動物(以上、真核細胞、寄生虫学関連分野)で構成される。細胞共生説によって立つのなら、真核細胞の出現も二種類以上のそれぞれ独立した生物の融合を起源としている。もちろん、当初は穏やかな共生というよりも、どちらかに病原性が強く生ずるような寄生現象に端を発していたはずであるが、感染とは、このように生物進化の原動力の一翼も担っていたイベントでもあったのである。

COP10の話題と最近の野鳥保護事業

帯広畜産大学 柳川 久

COP10（生物多様性締約国会議）の話題

私は「野生動物管理学」という名の講義を大学で担当しています。そこでは、野生動物の管理とは、私たち「人間」と「野生動物」がより良いかたちで共存してゆくための、学問であり実践（事業）である、と学生たちに話しています。ですから、私たちの仕事は野生動物を研究して知り得た事を学会などで発表し、論文を書き上げるところで終わるのでなく、それらによって得られた成果をいかに社会に還元・浸透させ、実践してゆくかというところまでが求められます。

最初から少し固い書き出しになってしまいましたが、ここで書いたような思いを、名古屋で開催されていたCOP10（生物多様性締約国会議）に参加して、より強く感じて帰ってきましたので、まずはその報告も兼ねた原稿を書かせていただきます。ただ、申し訳ないことに私は本来、モモンガやコウモリといった、飛ぶことは飛ぶけれど、鳥とはちょっと違う夜行性の小型哺乳類を中心に研究してきた人間ですし、名古屋に呼ばれたのもそれらの動物の人工的な移動経路に関する仕事を報告するためでしたので、最初は鳥の話は出てきません。まあ、時事ネタだと思っておつきあいくださいませ幸いです。

それで、話は名古屋でのCOP10に戻りますが、私が呼ばれたのは名古屋国際会議場で行われた本会議ではなく、その会議場周辺の公園と大学（名古屋学院大学）で行われていた「生物多様性交流フェア」という催しでした。本会議の行われている国際会議場では、連日のように難しい問題が論議され、周囲の警戒も厳重で、あまり近づきたくない雰囲気でしたが、周辺部の交流フェアはちょっとしたお祭りで、いろいろな国の政府、組織、団体がにぎやかに展示やオープンな議論をしていました。私も一応講演があり、国際会議の場であるということで少なからず緊張していったのですが、聞いているのはほとんど日本人だし、同時通訳はつくし、何となく気楽に話が出来ました。英語を使ったのは、せいぜい一緒に発表したメンバーとの打ち上げで、焼鳥屋に行ったときぐらいでしたから。

講演の内容について多少書いておくと、私の参加したシンポジウムのテーマはアニマル・パスウェイ、つまり人工的な動物の通り道に関するものでした。全部で4人の発表者でしたが、イギリスのヤマネの通路、ボルネオのオランウータンの吊り橋、山梨県のリシヤヤマネ用の通路、そして北海道のリシヤモモンガ用のエコ・ブリッジ（写真1）、コウモリの移動用トンネルと、利用する動物の種類や通路の大きさや構造など、バラエティに富ん



写真1 モモンガのエコ・ブリッジ

だものでした。

こういった人工的な動物用の通路は、道路の造成や森林の伐採などにより、生息地が分断された動物たちを、より安全に、より快適に移動させるための構造物です。この分野の研究は世界的にも少なく、今回の発表者も4人とも現役の研究者であり、同時にその構造物の製作に直接、間接に関わるクリエイターでもあったので、材質は何かいいかなど、内容がより具体的で、楽しくも実用的なシンポジウムであったと思います。

これらのシンポジウムを通じて、また会場周辺の100を超えるブースの展示を見ても、かつてのような「開発」か、「自然保護」か？という二極の対立はなりをひそめ、生態系との調和と、サステイナブル（持続可能）なその利用が、今後の主流となっていくことが身をもって感じられました。そういった面では我々の関わっている野生動物の管理は、今後より多くの場で求められるようになってくるでしょう。その思いを胸に、久しぶりに「やる気」を充電して名古屋から帰ってきました。

バードハウスと環境教育

さて、話題を野鳥にしましょう。名古屋から帰って4日後の日曜日、今度は小学校の低学年の子供たちを相手に青空教室（つまり野外）で、話をしました。場所は道東自動車道の十勝平原サービスエリア、集まった子供たちは帯広市と夕張市の小学生です。この道東道のサービスエリアには、平成17年から子供たちの作った色とりどりのバードハウスが架設されています。毎年この時期（10月下旬）になると、前年度の古いバードハウスを取り外

して、中身を確認・清掃、そして新たに作ったバードハウスを架設します。いつもは十勝管内の子供たちが相手ですが、道東道も来年度に札幌一带広間が全面開通になる予定で、現在最後の工事が行われている夕張の区間の小学生と一足お先に交流ということで、8月に帯広の子供たちと夕張にお邪魔して夕張の子供たちと一緒に作ったバードハウスを、今度は夕張の子供たちを十勝に招いて帯広の子供たちとともに架け直してきました(写真2)。

その子供たちを相手にどんな話をしているのかというと、先の名古屋でのCOP10の会場や講演でも、しばしば出てきた言葉で、最近ときどき耳にする「生態系サービス」という言葉があります。私たちは「バードハウス」を用



写真2 バードハウスの設置

いた活動を通して、子供たちへの環境教育の場で、この生態系サービスという概念を実例を示しながら、なるべくわかりやすく解説しています。

まず、子供たちが架けた、色とりどりのバードハウスは、高速道路のサービスエリアやパーキングエリアを休憩やトイレに利用する人たちに「癒しの効果」を与えていると思われます。無人施設で殺風景だった場所も、子供たちの自由な発想で作られたカラフルで可愛いバードハウスによって賑やかな景観となり、またそれに誘致され、その場所に現れるようになった野鳥の姿やさえずり、シマリスの愛らしい姿もそれらの空間に彩りを与える一要素です。特に雛に餌を与えるために、頻繁にバードハウスを訪れるニューナイスズメやシジュウカラ等の姿は、年配や子供連れのお客様の目を引いています。これらは生態系から我々が享受できる「生態系サービス」のうちの生態系の持つ「癒しの効果」です。美しい野鳥の姿、行動、さえずりなどを見聞きすること、またその懸命な子育ての姿に対する感動や感性が、心身を癒し、もしかしたらその人たちの自然に対する興味と理解を進めることになるかもしれません。実際にこれらの施設を利用した人たちのアンケートの回答には、バードハウスや野鳥、シマリスなどへの好印象の意見が多く寄せられています。これらの効果は経済的に評価することは難しいでしょうが、サービスエリア、パーキングエリアが本来持つ「疲労と緊張を解くためのサービス施設」という目的に十分貢献するものでしょう。これが、まず子供たちに説明するバ

ードハウスの効果、バードハウスによって得られる生態系サービスの1つです。

また「生態系サービス」の1つに生態系の持つ調整機能があげられますが、それにあたるものとしてバードハウスで営巣する鳥などによる害虫のコントロールがあげられます。バードハウスで雛を育てる野鳥は、その周辺で多量の昆虫類を捕獲するため、害虫の数が抑えられる可能性があります。十勝平原サービスエリア、長流枝パーキングエリアでは平成16年度まで植栽保護のためスミチオン乳剤やディブテックス乳剤などの薬剤を散布していましたが、平成17年度以降にバードハウスの設置を始めてからは、野鳥の保護と野鳥による害虫の抑制効果を考慮し、薬剤散布を休止しています。それによって自然環境に対する薬剤の影響を無くするだけでなく、薬剤の購入費用を抑え、また散布に要する労力も削減することもできます。これも生態系の持つ調整機能による「生態系サービス」の1つです。

ところで、このバードハウスを使った活動ですが、動物、特に野鳥にとってのバードハウスの効果はどう評価できるのでしょうか？実は正直なところ、色とりどりのバードハウスを架ける事については、私自身も疑問を感じている部分がありました。まず最初に考えたのは彩色されたバードハウスは野鳥に忌避されるのではないかとということ、また、たとえ使われても繁殖成功率などが劣るのではないかとということです。また、景観上の問題から、野外に色とりどりのバードハウスが設置される事が、風景の中に違和感を持ち込まないか、と言った疑問もありました。一度持った疑問は、解決しなければ、気持ちよく事業を進める事は出来ません。そこで、これらの疑問について、いろいろと調べてみる事にしました。

結果から言うと、これらの疑問は現時点では「問題がなかった」と考えています。まず景観上の問題ですが、これは先にも書いたように、逆の良い効果をもたらしているようです。私自身もこの景色を何度も見ていますが、サービスエリアやパーキングエリアなどの、元々人の手の入っている景色の中では、色とりどりのバードハウスは違和感がなく、特に冬枯れの寂しい景色の中では、かわいらしいアクセントとして機能しているように思われました。利用者のお客さんの声(アンケート)を見ても、バードハウスに関するものは、否定的な意見はほとんどなく、好評でした。

それでは、鳥たちの評価はどうでしょうか？現在までに3年間、これらのサービスエリア、パーキングエリアでの野鳥の営巣率、繁殖成功率(1羽でも雛が巣立てば成功)を調べていますが、昨年まで2年間の結果では、1年目の利用率が4カ所の平均で54%(48/94個)、繁殖成功率が81%(39/48個)、2年目の利用率が78%(65/93個)、繁殖成功率が78%(51/65個)と、他と比べて決して低い値ではないと思われまます。繁殖成功率の高い理由は、これらのサービスエリア、パーキングエリアとも無人で、ゴミの処理がしっかりしているためカラ

ス類やスズメがほとんど見られない事が一因だと思われます。営巣した鳥類はほとんどがニューナイスズメで、場所によって少数のシジュウカラによる利用がありました。また、ヒメネズミがおそらく繁殖用に、シマリスが貯食の保管用にバードハウスを使っていました。

タンチョウの越冬地分散へ向けた取り組み

さて、高速道路での子供たちへの話の一週間後、帯広市主催の環境交流会で、今度は大人相手に「野生動物と共存するいくつかの方法」と題した講演をしました。いつもは、こんなに続けて講演などの仕事が入る事はないのですが、今年は何かのはやりなのか、こういう巡り合わせになってしまいました。

その「いくつかの方法」の中に、十勝エコロジーパークで取り組んでいる、タンチョウの越冬地分散化計画があります。これは正式には十勝エコロジーパーク利用推進協議会・生物ワーキンググループという長い名前のチームで、取り組んでいる事業ですが、今年で3年目になります。釧路・阿寒地方に集中するタンチョウの越冬地を十勝地方にも設け、越冬個体の分散化を目指したものです。また、このエコロジーパーク内には、タンチョウにとって営巣可能な湿地があり、一部の個体にとっては年間を通した生息地を提供するという目的もあります。

幸いな事に、この事業は比較的順調な滑り出しで、1年目の2008年度からペアによる越冬が観察され、そのペアはそのまま翌シーズンもエコロジーパークにとどまり、繁殖にも成功しました。2年目の昨年度もペアも含めて6羽の利用が確認され、繁殖も確認されています。今年はいまだ1カ所だったデントコーンの給餌セットを3カ所4基と増やし、利用個体増と、観察のしやすさを目指しました。

現在までのところ、越冬個体も順調に増え、繁殖も成功とほぼ目標通りに事業は進んでいますが、今後想定されてくるいろいろな問題についても、考えていかなければなりません。人が利用する公園と言う場所での、タンチョウと人との距離感の問題。観光資源としての利用はどこまで許されるのか？越冬個体や繁殖ペアの数をどうコントロールするか。そして、越冬用の餌付けを、どこまで、どの程度の規模で続けるか。餌に寄せられるハクチョウ類やキツネなどの問題をどうするか。いろいろな問題が想定され、また事実持ち上がりつつもあります。でも、せっかくタンチョウたちが居着いてくれつつあるのだから、こういった問題にも一つ一つ前向きに向き合っていけたらと考えています。きっとそこらへんが、私の考える人間と野生動物のよりよい関係の共存と言う命題につながってゆくものだと思うからです。

鳥を見始めて

札幌市中央区 吉中 宏太郎

鳥を見る様になったきっかけは？

女房が野草を見る会に参加しようと集合の地下鉄の駅から、皆さんと歩き始め、途中でグループを間違えた事に気が付きましたが、そのまま同行することにしたそうです。そのグループは日本野鳥の会札幌支部でした。彼女はそこで鳥を見ることの楽しさを知り、平成18年に北海道野鳥愛護会に入会させていただきました。

私は探鳥会の場所へ送り迎えすることが時々あり、平成19年春のウトナイ湖の探鳥会も頼まれて出かけましたが、そこで参加の皆さんと共に、鳥を見ないかと誘われました。誘いに乗って皆さんと歩き始め、双眼鏡で鳥を見たのが、これが初体験でした。悪天候でしたが、参加の皆さんは真剣に双眼鏡、スコープに目を当て、初めて聞く鳥の名前を沢山、声に出していました。皆さんはこれを知っておられるのだと思うと、鳥の姿、名前を覚えるのは大変困難な事だと思いました。当日は年会費の払い込みを受け付けされていて、女房は勝手に私を加えて家族会員として会費を納めました。これが私の鳥との永い繋がりと成るであろう、最初の一步となりました。

北海道野鳥愛護会の会員となった事で、探鳥会には出

来るだけ参加しようと思う様になりました。双眼鏡、スコープで見る鳥の美しさは、肉眼で見るとは全く違って、複雑な色の美しさ等、初めて見る別世界のもので驚きました。姿、色、動き、それぞれの鳥により違いますが、それぞれが躍動的で美しく、見る喜びと感動を覚える様になりました。感動の気持が生ずる事は殆ど無くなっているこの頃ですが、鳥を見ることでこの齢になってこの様な新鮮な気持を持つことが出来て、大変嬉しく思っています。“鳥を見て感動を味わう”この思いが今の私共の鳥を見に行く大きな源となっています。そして探鳥会の日はなるべく他の予定は避けて、スケジュールを立てる様になりました。

参加して、皆さんの話をお聞きし、何処に鳥を見る良い場所があるかを、徐々に知る事ができました。場所が分かると見に行きたくなり、鳥を見る機会が更に多くなってきました。札幌近郊始め、道内であれば出かけて見に行きたいと思う様になり、少し遠くの函館、室蘭、天売・焼尻島、札文島、根室、羅臼、等にも行ってみましたが、鳥の知識の少ない私どもは、鳥を見ても半数以上の鳥は、名前が分かりませんでした。そこで、どなたかに一緒に

来て教えていただきたいと思う毎回でした。

小旅行で鳥を見に出かけるのは鳥だけでは無く、その土地の人々、食べ物、風景、等に触れる楽しみもあります。鳥を見に出かけて必ず期待する鳥が見られるとは限りませんが、見られなくても、これも鳥見と思って、又の機会に楽しみを取っておこうと納得しています。期待の通りに見られたときは大きな満足感に浸ることができます。又、偶然に珍鳥に出会った時は、舞い上る気持を抑えきれない程の感動に浸ることもあります。

この頃は皆さんに教えていただき、鳥の事が少し分かってきました。羽の色が変わる事、鳴き方も変わり、見られる時期がある事、似た様な鳥の見分け方、等々、同じ鳥でも見る時により様子が違うので、どの様な姿で出会えるのかと、都度楽しみが膨らんでいきます。

鳥を見始めて間もなく、写真にして納めたいと思うようになりました。仕事をしていました時には、商品の写真を撮ることが時々有り、その為のカメラ、レンズが手持ちの物で有りましたので、これを使って鳥を撮ろうと始めましたが、勝手が大きく違って戸惑いました。以前、被写体は動かない物で、ライトで光を当て、三脚にカメラを据えてシャッターを押して写真を撮っていました。だが鳥は近くには居てくれず、動きが多く、留まる時間が短く、自然の光の下にいます。これに合わせてシャッターを切るのは至難の技と知りました。小学生の頃からカメラをいじっていましたので、写真には関心があり、どうすると綺麗に撮れるのか、試行錯誤しました。愛護会の先輩に色々お聞きして、撮影技術の未熟なこと、手持ちの機材では限界のある事を知りました。写真の機材は種類が多く、とても高価な物まで数多く有りますが、証拠写真を撮ることを考えて、カメラとレンズを用意しました。愛護会のメンバーの方々は大変親切で、分からない事は丁寧に沢山教えて下さいました。

今何とか写真を撮る事が出来る様になったのは、皆さんのおかげと感謝しております。そして、更に撮った写真を見る楽しみを得ることができました。見た鳥はその場を離れると記憶に残りますが、私は間もなく記憶があやふやとなり、見た鳥をイメージできなくなります。図鑑を見ると鳥の姿は分るのですが、見たときの様子はイメージできないことが多いのです。自分で撮った写真は鳥を見ていた時の様子を再現してくれます。鳥を見て感動し、写真に撮って楽しむ、この様な事が出来るとは、鳥を見始めるまでは思いも寄らない事でした。

長く続けてきた仕事を終えて、この先どの様にして暮らして行くのかと思ひながら、引退後の事をあれこれ考えていましたが、今はおかげ様で、充実した日を送っています。これも、鳥を見ることで得られた事です。鳥を見ることで得られたものはまだ有ります。それはもっと大きなものです。鳥を通してたくさんの方々とお会いできたことです。人との繋がりが少なくなっていく中で、新たな出会いが生まれてくるのはとても素晴らしく、嬉しい事と思っております。鳥を見始めて自分の暮らしの様子がアクティブに変わっているのを感じています。

思いますに、60歳半ばともなりますと、若い時と違って柔軟に対応できず、新しい試みは難しいことが多いと思っておりますが、北海道野鳥愛護会の皆様は親切で温かく、周りを見て下さいますので、こうして鳥を見る事が出来る様になりました。北海道野鳥愛護会の皆様、特に会の維持に尽力されておられる役員の方々に、感謝しております。

最後に偶然が重なった思い出深い写真を一枚掲載させていただきます。平成21年4月19日12時45分、礼文島久種湖で、見たことの無い鳥を撮りました。コウノトリで、鳥では35年振りの飛来との事でした。この写真が、鳥で最初に撮った写真の様でした。



礼文島久種湖の上を飛ぶコウノトリ 2009. 4. 19 筆者撮影

ヒグマによる人身事故防止について

北海道環境生活部環境局自然環境課野生鳥獣グループ 幌村 幸司

1 はじめに

貴会が野鳥保護思想の普及のための指導者の養成、各種情報・資料の交換や研究の場の提供、各地に設立されていた諸自然保護団体の連携を図るなどの40年を超える長年の活動が評価され、今年度初めに環境省自然環境局長表彰を受賞されたこと、その御功績に対し深く敬意を表し、御祝い申し上げます。

また、日頃より、本道の自然環境及び野生鳥獣保護行政にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

2 本州でのツキノワグマ報道など

さて、昨今、クマに関する報道が増えておりますことから、野鳥観察などで山に入る場合の危険防止のため、情報提供申し上げます。

北陸地方や南東北地方、中国地方などでは、山の実なりが凶作のため、人里付近や市街地に出没しているほか、建物などにも入り込む状況が発生し、人身事故のみならず、学校の休校や行事の中止、外出自粛などの住民生活への影響も大きいことなどが連日報道されております。

過去に出没例がほとんどなかった地域の都市近郊（愛知県、神奈川県）などにも出没し、不慣れな地域によっては、かなりの混乱も見られているようです。

環境省の発表でも、例年全国で1,000～2,000頭程度の捕獲数や例年50人程度の人身被害も9月末の集計でそれを超え、2006年度の大量出没・捕獲年に匹敵するような状況です（表1）。

表1 2004年度以降の捕獲数（単位：頭）

	捕獲数	補殺数	非補殺数
2004年度	2,546	2,326	220
2005年度	1,175	1,101	74
2006年度	5,185	4,679	506
2007年度	1,393	1,283	110
2008年度	1,493	1,370	123
2009年度	1,684	1,570	114
2010年度*	2,366	2,120	246

（出典：環境省 *2010年度は9月末暫定値）

3 本道の現況

本道においては、昭和37年度から平成22年6月までに発生したヒグマ事故では、123件の事故で47人の方が死亡しています。

ヒグマは全道に分布している（図1）、山野などには、ヒグマが必ずいることを認識し、事前に関係機関に出没情報を確認するなど、十分に注意してください。

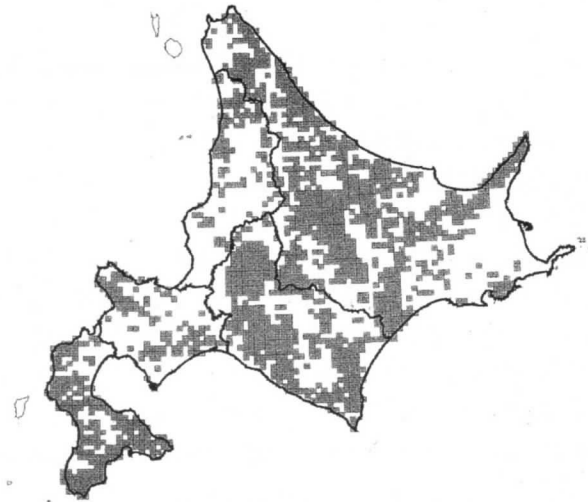


図1 1997年調査結果によるヒグマの分布

主要なヒグマのエサである山菜やヤマブドウ、サルナシなどの山の実の採取や、ヒグマが移動帯、採餌場所として利用している河畔付近での野鳥観察などでは、十分な注意が必要です。

〔「ヒグマの保護管理」

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/yasei/yasei/higuma>）

また、道では、ヒグマによる人身事故が発生した場合には、今後の事故防止に役立てるため、被害者やその関係者

表2 人身事故発生時の原因内訳（H22.11現在）

原因	件数	うち死亡	月間	月間率	死亡率
山菜採り	27	13	14	51.9%	48.1%
山林作業	17	4	6	35.3%	23.5%
ヒグマ駆除	27	10	17	63.0%	37.0%
ヒグマ狩猟	17	6	7	41.2%	35.3%
シカ狩猟	6	1	0	0.0%	16.7%
川釣り	4	4	3	75.0%	100.0%
農作業	10	2	4	40.0%	20.0%
その他	15	7	2	13.3%	46.7%
合計	123	47	53	43.1%	38.2%

（S37～現在におけるヒグマ注意特別月間の件数）

*「ヒグマ注意特別月間」は年間約3ヶ月間（4月上旬～5月上旬、及び9月中旬～10月末）だが、年間事故の約半数を占める。

から事情を聞き、被害地の調査により、事故に至った原因や生還できた状況を調査・分析しています(表2)。

4 事故防止のために

件数の多寡による単純な比較はできませんが、目的や行動形態(複数行動、音を立て存在を周知、見張りの徹底、薄暮時を避けるなど)、時期や時間帯を勘案のうえ、ホームページに掲載の基本事項を徹底し、危険を感じたら引き返すことも必要です。

場所や時間帯に応じて、十分に注意してください。

〔ヒグマに注意〕

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/yasei/yasei/caution.htm>

また、近年、ヒグマが都市近郊や市街地、集落周辺にも出没する傾向があり、野鳥観察や散策などの場合も、過去と状況が変化しつつあることの理解も必要です。

国マニュアルでも1978年と2003年の比較で、ヒグマの生息確認メッシュは6.5%増加しており、生息分布域の拡大が見られています。

これについては、平成21年度から「ヒグマによる被害・出没状況調査」を開始しており、この分析結果については、追って情報提供を予定しています。

これらについては、次のとおり、当課ホームページに掲載しています。

★近年の都市近郊や市街地、集落周辺にも出没する傾向について(推測)

近年、「以前よりも都市近郊や市街地、集落周辺にヒグマが出没する傾向が多くなっている。」と狩猟者などから耳にする機会が多くなっています。

また、河川敷や排水路、防風林などを移動していることから、目撃情報がないまま、市街地に接近した例も報告されていますので、自治体などの出没情報にもご注意ください。

市街地などに出没する原因については、よくわかりませんが、次の環境省のマニュアル記載事項などを参考にしてください。

<参考抜粋>

環境省：クマ類出没対応マニュアル「クマが山から下りてくる 要約」

2. クマ類と中山間地域の状況

- ・クマ類の人里への出没の背景には、森林環境、特に里地里山の変化、中山間地域の社会環境の変化、さらには狩猟者の減少などが総合的に作用していると考えられます。
- ・里山の森林の高林齢化や耕作放棄地の増加により、里山里山におけるクマ類の生息適地が増加している。
- ・中山間地域の過疎化、高齢化による野生動物に対する地域の防除力が低下している。

- ・クマ出没に対処できる狩猟者が減少している。

5 おわりに

道におきましても「北海道野鳥だより」は、貴重な資料として拝見し、地域の鳥類相や希少種の観察報告などを業務の参考にさせていただいております。

この場をお借りしまして、御礼申し上げますとともに、貴会の益々の御清祥を祈念申し上げます、終わりの言葉とさせていただきます。

<余談>

平成22年11月4日早朝5時半ころ、札幌自宅付近の鳥類が一斉に騒ぎ出したので、目が覚めました。悲鳴のような尋常ではない鳴き声で、寝ぼけながらも不思議に思っていたところ、十数秒後に、突然の地震がありました。後の報道によれば、浦河沖(震源の深さ約30km)地震の規模マグニチュード4.5、札幌近郊は震度1とのことでした。

また、以前、漁船に乗り込み、天売島近海の高鳥類の採餌範囲調査に従事したことがありますが、漁船上空のカモメ類が翼下を鳥瞰しつつ探餌しているのが見える中、突然、何の兆候もなかったのに、上空から降って湧いたようなウトウの大群が急降下し、海面に白波を立てるほどの勢いで、貫入していきました。

船頭さんの呼びかけで、ソナー(魚群探知機)を見ると、それまで何も動きのなかったソナー画面の中は、波形が大きく上下しており、海中ではウトウが水中飛翔で魚群を追い回している状況が推察されました。

地震のP波よりも早くそれを察知したり、ソナー、GPS等の電子機器類もないのに、海中の魚群の位置を的確に把握し餌を追跡するなど、我々の文明や科学技術をも超える野鳥たちの秘めたる能力に、野生生物保護や生物多様性保全の重要性をあらためて認識したところです。

クマ類出没対応マニュアル

—クマが山から下りてくる—



<http://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs5-4a/pdfs/000cover.pdf>

ヨーロッパトウネン観察記

札幌市手稲区 高橋良直

珍鳥とされるヨーロッパトウネン（学名*Caridris minuta*）を間近に観察するという貴重な体験をしたので報告します。

2010年10月9日午前11時頃、石狩市の通称石狩浜の南端側、石狩湾新港の防波堤から北東へ1kmほどの波打ち際で10羽ほどのトウネンが採餌しており、その群れから少し離れたところで1羽の、背中がかなり黒っぽく見えるトウネンが採餌していました。背中黒さはトウネンとは別種かと思わせるもので、もしかしてヨーロッパトウネンかも？と思いましたが、それまで実物を見たことがなかったこともあって、確信は持てませんでした。クルマの中からいくらか写真を撮ることができましたが、このときは10分ほどで姿を見失いました。

帰宅後写真を見ると背全体が黒っぽく、特に風切羽の軸班の黒さと羽縁の赤味が写真図鑑で見るヨーロッパトウネンの夏羽によく似ていると思われました。背中白いV字模様はさほど目立ちませんが、嘴はトウネンのものより細くて長く見えることから、やはりヨーロッパトウネンだろうと思いました。



ヨーロッパトウネン 2010.10.10 石狩浜

翌10日は朝から雨で、雨の日に鳥見に出かけることは普通しないのですが、この鳥が気になり、午後から石狩浜に出かけました。その鳥は昨日とほぼ同じ場所で10羽ほどのトウネンのそばで採餌をしていました。トウネンのそばにいながら、採餌をする際はトウネンとはいくらか距離をおいているという印象を受けました。トウネンは、足が波に洗われるのを嫌って、非常にせわしない動きをしますが、この鳥の動作はトウネンに比べると、ゆったりと落ち着いた感じでした。

さらに翌11日も石狩浜に行きました。このときは数人の鳥仲間と一緒に午前10時頃から3時間ほど観察しましたが、石狩湾新港の防波堤そばの、ゴミっぽい砂地の中にトウネン約20羽と一緒に座り込んで、ほとんど動きませんでした。中にヘラシギが1羽混じっていて、ヨーロッパトウネンと並んだりすることもあり、たいへん贅沢な体験をしました。本個体が観察されたのはこの3日間で、翌12日以降は観察されていないようです。

掲載した写真は低い位置でほぼ真横から撮影したのですが、嘴の形と長さ、足の長さがトウネンとは異なることが分かります。この個体は、頭から胸にかけて強い赤味があり、成鳥で、夏羽から冬羽に換羽中のものと考えられます。本種の特徴として背中白いV字模様が目立つということがよく言われるようですが、この個体ではさほど目立たず、普通のトウネンでも、まれに非常にV字が目立つ個体がいるので、識別の決め手にはならないように思います。

本種は、北極圏で繁殖し、主としてアフリカ大陸南部で越冬するため、春と秋にはヨーロッパ各国を通過し、それが和名の由来になっています。本道での観察例はいくつかあるようですが、札幌近郊では1997年9月の当別町の石狩川河川敷での観察（広川淳子、北海道野鳥だより第111号、1998）以来となるようです。

【閑話】 野鳥あれこれ ヨーロッパトウネンの呼称について

学名*Caridris minuta*（英名Little Stint）は日本ではヨーロッパトウネンと呼ばれたり、ニシトウネンと呼ばれたりしていました。日本の鳥の現在の戸籍簿である日本鳥類目録改訂第6版（日本鳥学会 2000）ではヨーロッパトウネンとされており、それに合わせるのが通常ですが、「ニシトウネン（別名ヨーロッパトウネン）」のようになって

いる図鑑などもまだ少なからずあります。将来的にはすべてヨーロッパトウネンに統一されることと思います。

一部の人たちの間では、略して「ヨロネン」と呼ばれることがありますが、あまり良い響きではありませんし、かなりマニアックです。せっかくの名前ですから、少々長くても略さずに呼びたいものです。 広報部



石狩川河口

2010. 8. 15

札幌市豊平区

吉川 茂子

石狩川河口の探鳥会に2回目の参加です。海、川を見たくて来ました。風がありましたが、海、川の音は静かに感じました。オギが一面にあり、風にゆれ秋を感じ、キリギリスの鳴き声を聞きながらの探鳥会でした。

始まる前、待っている時カワラヒワを見ました。黄色の部分的な色がとてもきれいでした。海の近くを歩き始めていくとハクセキレイがとびかかっていて元気そうでした。次にアオサギ、アジサシを見ました。アジサシには初めて出会いました。動かないでじっとしていたので双眼鏡でもゆっくり見ました。双眼鏡ではまだ鳥が良く見えなかったのですが、しっかり見えてうれしかったです。オオセグロカモメの幼鳥も見ました。波を背に岸辺を見つめていました？ ショウドウツバメやホオアカにも会いました。双眼鏡でははっきり見えなかったのですが、鳴き声、動きなどを見ました。

ハマナスの実がオレンジ色でいくつか花が咲いていました。ハマボウフウの実、オニユリ、ハマニガナの花が咲いていました。エゾカワラナデシコの花が所々で咲いていました。私には紫色系のピンク色に見え本当にきれいでした。アカツメクサもまだ赤い色がきれいでうれしかったです。ヴィジターセンターの休憩室でお弁当を食べました。渋井一夫さんの絵を見てゆっくりしました。食事がおいしく、食べ過ぎに注意ですが、弁当、お菓子がおいしく食べられてうれしいです。

探鳥会、自然観察会に参加すると、つらい事、悲しい事を忘れてしまいます。不思議ですねえ。ゆっくりと自分のペースで鳥や自然と出会って行きたいと思っています。関係者の方の下見に感謝します。また、より充実できるように配慮して下さり、ありがとうございました。

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、ソリハシシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、ホオアカ、カワラヒワ、ハシブトガラス 以上14種

【参加者】今村三枝子、岩崎孝博、漆崎 修・美枝子、栗林宏三、後藤義民、佐藤尚輔、品川睦生、高田征男、高橋良直、竹田芳範、辻 雅司・方子、寺地栄一、中正憲信・弘子、中村 隆、成澤里美、野田貴代子、蓮井 肇、畑正輔、原 美保、樋口孝城、松木 修・ゆう子、山本和昭、横山加奈子、吉川茂子 以上28名

【担当幹事】中正憲信、岩崎孝博

鷓川河口

2010. 8. 29

8月中旬の大雨のため、河口に行く手前の橋が壊れて、通行不能になってしまいました。長靴であれば川を渡ることもできたのですが、ともかくも安全第一ということで中止としました。その後、橋は修復されましたので、来年5月の探鳥会に支障はありません。

野幌森林公園

2010. 9. 5

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、ハヤブサsp.、オシドリ、マガモ、アオバト、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上18種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、梅原 進、柴田吉子、大田敏枝、後藤義民、小西美美枝、小松正幸、品川睦生、田中 陽・雅子、田辺 至、中正憲信、成澤里美、野田貴代子、畑 正輔、浜野チエ子、辺見敦子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、山田博之、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 以上25名

【担当幹事】品川睦生、成澤里美

石狩川河口

2010. 9. 19

【記録された鳥】ウミウ、ダイサギ、アオサギ、トビ、ハヤブサ、チュウシャクシギ、ホウロクシギ、ミユビシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、ヒバリ、ノビタキ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、カワラヒワ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上19種



ホウロクシギ 2010. 9. 19 石狩川河口 参加者撮影

【参加者】井上詳子、今村三枝子、岩崎孝弘、内田房子、栗林宏三、後藤義民、坂井伍一、品川睦生、高橋きよ子、竹田芳範、立田節子、辻 雅司・方子、戸津高保、中正憲信、蓮井 肇、畑 正輔、原 美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、山本和昭、横山加奈子、吉川茂子、吉田慶子 以上25名
【担当幹事】中正憲信、横山加奈子

宮 島 沼

2010. 10. 3

札幌市西区 北山 政人

前日の天気予報では、曇りのち雨で、朝の札幌の空を見ると不安になってしまいましたが、天候が崩れだすのは夕方との予報をあらためて見て、一安心して家を出ました。ほんの半月ほど前は夏の暑さが残っていましたが、急速に秋が深まらんとばかりに朝晩はすっかり寒くなっています。この秋の鳥たちの渡りに、この晩夏を含め、最近の異常気象がどんな影響を与えているのか、興味深いものがあります。それを知るためにも、なるべく野外に出て、しっかりと記録を録って、以前の記録と比べてみるのも良いかと思えます。宮島沼の秋シーズンも、以前と異なり、マガンの移動が早くなり、ガンたちの観察期間が短くなっています。もともと春よりは長く居着かない傾向にありますが、近年さらに顕著になっているようです。そうは言っても、この季節、マガンの大群だけでなく、宮島沼の鳥たちの様子が気になることです。南へ向かうのが早まっても、餌を採るために出かけていて沼が寂しい状態が続く事になる可能性があっても、春と同様にここに来るのが楽しみです。少々早めに来てみました。沼の近くの防風林や草地にはムクドリやカシラダカやアオジなどが南へ向かう気配を見せています。空は相変わらず曇り空でマガンの多くは、やはり餌を食べに飛び立っています。マガンとヒシクイが少数いるだけです。カモ類は狩猟シーズンが始まったせいか、春よりも多くが沼に入っています。オナガガモが多くいるので、少数のトモエガモが入っている可能性がある、経験上感じたので、探してみました。寝ているのが多く、頭部が良く見えない状態なので、残念ながら発見できませんでした。ハシビロガモなどは確認できました。すでに熱心な愛護会の会員の皆さんが到着していました。多くは北海道より南で冬を越すであろう、ユリカモメが数羽、沼に入っています。ウミネコも1羽いました。オジロワシ、チュウビなどの宮島沼の探鳥会にて、ほぼ常連?の猛禽類も確認できました。宮島沼生まれと思われるカイツブリの幼鳥も見られました。

探鳥会が始まって、しばらくしてから沼にマガンたちが、徐々に帰ってきました。マガンの群の飛翔は何度見ても飽きることなく感動的です。もう少しで鳥合わせをして探鳥会終了か、という時間になったのですが、朝と異なり多くのマガンが沼に戻って来ていたので、もう少しマガンとヒシクイ以外のガンの種類を探してみる事にしました。カリ

ガネが1羽、シジウカラガンが3羽、マガンのアルビノと思われる個体を1羽見つける事ができました。天候の方も、曇り空で風もやや強いといった状況でしたが、雨にあらず無事に探鳥会終了時まで天候は持ちこたえました。私が鳥に興味を持ち始めた時、春と異なり、秋の宮島沼にはマガンたちは降りる事は無く、鳥たちの気配も無く寂しいもので、狩猟解禁となれば、散弾銃の葉莢が落ちていたものです。鳥たちにとってもバードウォッチャーにとっても現在の状況は良いものだと思いますが、農業被害など、解決すべき問題は多く残されています。また、マナーやモラルといった言葉と無縁なカメラマンの蛮行が、鳥たちだけでなく、地元の方々にも迷惑をかけているようです。ガンたちと人間との関係がより良いものとなり、宮島沼が鳥たちにとって安心して翼を休められる場所となれば、と思いました。

【記録された鳥】カイツブリ、ミミカイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウビ、ノスリ、シジウカラガン、コハクチョウ、マガン、カリガネ、ヒシクイ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、ウミネコ、ユリカモメ、キジバト、アカゲラ、ヒバリ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上33種

【参加者】阿部真美、岩崎孝博、岸谷美恵子、北山政人、栗林宏三、佐藤ひろみ、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋良直、田中 陽・雅子、徳田恵美、中正憲信・弘子、成澤里美、蓮井 肇、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、辺見敦子、山本和昭、吉田慶子 以上25名

【担当幹事】北山政人、佐藤ひろみ

野 幌 森 林 公 園

2010. 10. 10

江別市 小西美美枝

前夜からの雨の続きで、さすがに参加者は少なく9名で鳥を見てまわりました。雨のなかですので当然見透しは悪く、双眼鏡を当てても、その色などはぼうとしてシルエットしか分からないのですが、ほんのちょっとした鳥のうごきでその一部の色彩が見えたり、それなりに彼らはきれいでした。

歩きはじめのユズリハコースでは主にカラ類、キバシリ、それにヤマゲラがひと声だけ啼いてくれました。

志文別コースでは何年か前の台風で木が倒れ、少し開けてしまった処があり、見通しがよく、だれかが「アトリ」の声をあげました。急いでそちらの方向を見ますと、高い木のその上部と空とのなかにたくさんの小さな鳥が見えます。前記のように判断しづらかったのですが、皆さんがアトリというのでそう思って見ていると胸のあたりの色がたしかにアトリで、その隣の木の上部にはツグミがこれまた数多くいました。そして一帯の空間で飛ぶ、止まるをく

りかえします。そのあいまをハイタカがよこぎりました。まさしく圧巻です。この日のクライマックスでしょう。私は今季初めての確認です。このような場面に逢うたびにどうしようもない嬉しさを感じます。鳥達はそのひとつひとつに固有名詞をもつことの重みのような気がします。

四季美コースの大沢の池ではあまりきれいでない？オシドリがたくさん向こう岸の方で泳いでおり、また羽ばたいて飛ぶ姿も見せてくれました。

いつもの大沢園地での昼食は省き、ゆっくりと雨の森林浴などをしながら帰着の交流館で「とりあわせ」、昼食後、田向一彦氏の鳥の写真展を見て解散しました。

みなさんが教えて下さるので私もいろいろ見ることができました。ありがとうございました。

帰宅後、まだ雨は降っています。道路からはねかえるたびに水は白くはじけています。

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、ハイタカ、オシドリ、コガモ、マガモ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、アトリ、ハシブトガラス 以上21種

【参加者】後藤義民、小西芙美枝、品川睦生、中正憲信、畑 正輔、広木朋子、松原寛直・敏子、横山加奈子

以上9名

【担当幹事】後藤義民、横山加奈子

野幌森林公園

2010. 11. 7

【記録された鳥】トビ、オオタカ、アオバト、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマガラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、レンジャクsp.、ツグミ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、ハシブトガラス 以上24種

【参加者】阿部真美、荒木良一、伊藤喜多子、井上公雄、井上詳子、今村三枝子、柴田吉子、太田敏枝、影谷 實、栗林宏三、後藤義民、小西芙美枝、坂井伍一、品川睦生、杉田範男、高橋きよ子、竹田芳範、田中 陽・雅子、辻雅司・方子、戸津高保、内木克巳、中正憲信・弘子、野田貴代子、蓮井 肇、畑 正輔、早坂泰夫、広木朋子、松原寛直、山本昌子、吉田慶子、吉中宏太郎 以上34名

【担当幹事】中正憲信、松原寛直

ウトナイ湖

2010. 11. 14

札幌市西区 北山 政人

集合場所の近くでカササギが2羽いました。ユーラシア大陸の広い範囲と、北米西部などに分布しているカラス科の鳥です。九州の一部で繁殖している個体群は以前に朝鮮

半島から人為的に持ち込まれたものと言われています。最近では苫小牧周辺などで、普通種になりました。どういう経路でこの地に持ち込まれたのか、あるいはある程度の数が自ら海を越えて北海道にやって来たのかよくわかっていないようです。お隣のロシアでも、本来は生息していなかった場所で見られるようになった例があるみたいです。元来は留鳥性が高く、自然分布ではなく人為的な移入の可能性が高いと思われますが、いずれにしても、北海道のカササギについては興味深いものがあります。確実に個体数が増えているように思えます。湖の方にはカモ類の姿は少ないようです。今年は昨年と比べると南へ移動するのが早いように感じます。アオサギを確認できず、ダイサギが多く見られた事も、以前のウトナイ湖の風景とは異なるように思えました。繁殖しなくなり、姿を消した鳥もいれば、以前は見られなかったが、今は普通に見られている鳥もいます。ウトナイ湖だけでなく、ここ十年ぐらいをみても、北海道の鳥類の生息状況は変化しています。純粋に野鳥観察を楽しむ事も大事ですが、観察記録をきちんと残す事の重要性を改めて感じました。

【記録された鳥】ウsp.、ダイサギ、トビ、オジロワシ、チュウビ、オオタカ、ノスリ、ハヤブサ、オオハクチョウ、



ウトナイ湖探鳥会風景 2010. 11. 14

コブハクチョウ、マガン、ヒシクイ、マガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、オオセグロカモメ、ヒヨドリ、ツグミ、ハシブトガラ、シジュウカラ、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上29種

【参加者】阿部真美、井上詳子、今村三枝子、岩崎孝博、北山政人、工藤一紀、工藤令子、後藤義民、小堀煌治、坂井伍一、品川睦生、清水朋子、高橋晴美・いちか、高橋良直、田中 陽・雅子、中正憲信、蓮井 肇、濱野由美子、畑 正輔、平野規子、松原寛直・敏子、山本昌子、吉田慶子、吉中宏太郎、鷺田善幸 以上28名

【担当幹事】北山政人、鷺田善幸



【小樽港】2011年1月16日(日)
札幌からの貸切バスを利用して
行きます。探鳥コースは日和山灯
台付近、祝津漁港、高島漁港、フ
ェリーターミナルなどで、海ガモ
類、カモメ類、ウミスズメ類など
が中心です。アビ類も見られるか

もしれません。以下の要領で行いますので、参加希望者は
申込み下さい。

集合場所 札幌駅北口(中央)「鐘の広場」

集合時刻 午前8時

帰着時刻 午後4時頃

定員 45名

参加費 1,500円

申込先 畑 幹事 (Tel 011-894-0017)

1月5日(水)から7日(金)まで電話で受け付け
ます。受付時間は午前9時から正午までです。定員
になり次第締め切ります。

その他

- ・小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食を取ります。
- ・往復とも途中乗車・下車はできません。

【野幌森林公園】2011年2月6日(日)

雪に覆われた森は、厳しい寒さの中で近づく春を待って
います。この時期に見られる鳥たちは、ツグミ、アトリ、
マヒワなどの冬鳥と、留鳥のアカゲラ、コゲラ、キバシリ、
キクイタダキ、カラ類、そして冬によく見られるウソ、シ
メ、カケスなどです。状況によっては雪中行進になるかも
しれませんが、フクロウにはもちろん、クマガラにも会え
る可能性があります。

集合 午前9時 野幌森林公園大沢口

交通 新札幌駅ターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢公園入口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

【円山公園】2011年3月6日(日)

日中の日差しにも春が感じられる季節を迎えています。
キツキ類、カラ類などのいつも見られる鳥に加え、ツグ
ミ、カワラヒワ、アトリ、ウソ、シメなどが見られます。
色鮮やかな(亜種)ベニバラウソが見られたこともありま
した。さえずりも聞かれ始めます。午前中で解散の予定で
す。

集合 午前9時 円山公園管理事務所前

交通 地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】2011年3月20日(日)

日本各地やさらに南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの
時期群れをなして北の繁殖地に渡りはじめます。ウトナイ
湖はこれらの渡り鳥の中継地として賑わいを見せ始めます。
多くのカモ類の他、オジロワシやオオワシなども観察され
ます。集合場所からサンクチュアリまで湖畔沿いに歩き、
サンクチュアリ建物内で昼食となります。春近しとはいえ、
天候次第では随分と冷え込むこともあります。暖かい身支
度でご参加下さい。

集合 午前9時30分 野生鳥獣保護センター駐車場

交通 千歳空港発のバスがあります。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ち下さい。

☆何れの探鳥会も悪天候でない限り行きます。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

午前10時~午後4時(土・日祭日を除く)

鳥民だより

◆新年講演会のご案内◆

・日時 2011年1月8日(土) 13:30~16:30

・場所 札幌エルプラザ内

札幌市男女共同参画センター 4階大研修室
北区北8条西3丁目(札幌駅北口より徒歩3分)

・講師 川路 則友氏

(独立行政法人 森林総合研究所北海道支所長)

・演題 札幌の森林の中でヤブに潜む小鳥の繁殖事情

・講演内容:札幌市近郊の森林に毎年南方から渡ってく
る夏鳥たち。とくにササなどのヤブに潜んでなかなか
姿を見せてくれない鳥たちは、果たしてうまく繁殖に
成功しているのか気になりませんか?彼らの生態を羊
ヶ丘の森で観察した結果、いくつか興味深い事実がわ
かりました。とくにヤブサメの面白い繁殖生態を中心
にお話したいと思います。

・野鳥写真映写(15:20ぐらいから)

皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。問い合わ
せは高橋幹事まで(BRB32264@nifty.com)。

・参加費 500円

・懇親会 新年講演会終了後、煉瓦亭(北1西3、三和
ビル地下)で行います。会費は3,500円程度です。前も
っての申し込みは不要です。どうぞご参加下さい。

【新しく会員になられた方】

野田貴代子 江別市

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>